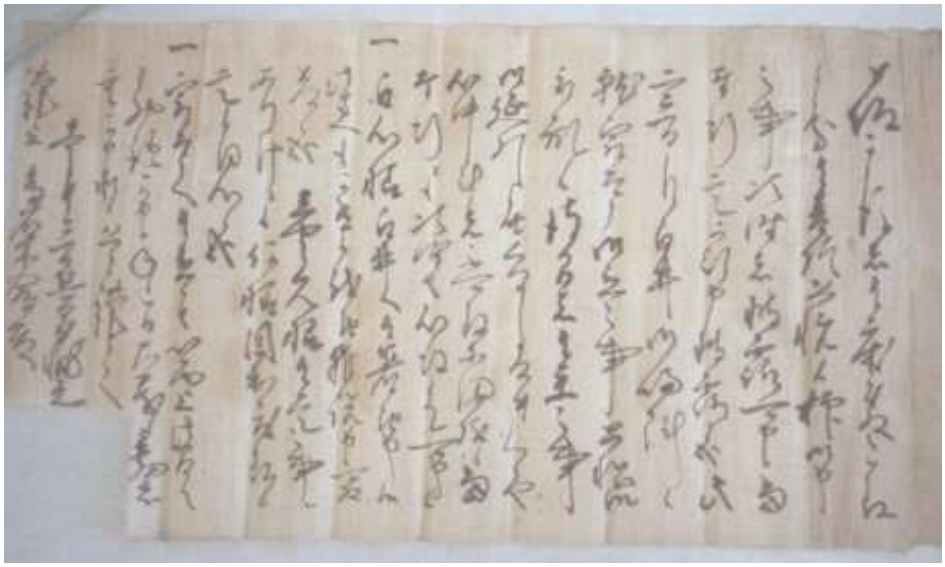
## 所蔵史料紹介

# 関東管領山内上杉氏家臣・兵部少輔元□書状

茨城県立歴史館史料部では、茨城県の歴史の根本史料となる『茨城県史料』（全３７冊）を刊行してきました。中世編では計６冊が刊行され、そのうちのⅠからⅢまでの３冊が県内所在文書を扱い、Ⅰには行方市手賀の鳥名木家の所蔵する「鳥名木文書」計４１点が載せられています。また鳥名木文書は、平成５年に当館に寄託され、管理が行われています。鳥名木文書は鳥名木村を本拠とした東国の村落規模の武家文書として著名です。

ただ残念ながら、『茨城県史料』本では、刊行時に２点の文書が未採録で、ここではそのうちの１点を紹介したいと思います。室町時代の東国政治史に新たな知見をもたらすものです。



如仰、其後者御床敷令存候処、御音信恐悦候、抑御申之事、次時者披露可申候、当奉行定可被申披露候哉、此①二三日自白井御帰陣候、就完戸御立之、恐悦候、取乱候彼間者、御参之事御延引候共、くるしなき候哉、心中斗者不可存、子細儀も当奉行ニも次時者心得候て、可申候、

一、②白心様、白井へ御着由申候、此方へも可有御越由、雑説申候、可為如何候哉、し③やうくん様御定之事ニありけニ候、何様目出度存候、定御同心候哉、

一、完戸へ御立候者、以面上此間之御物語可申承候、大慶候、委細者重申承候、恐々謹言、

十一月十三日　　兵部少輔元□

謹上　鳥名木入道殿

本文書は、姓と名前の一字が不明ですが、「兵部少輔元□」なる人物から、鳥名木入道に宛てられた書状です。鳥名木入道とは当時の鳥名木家当主国義のことで、室町時代関東一円を支配した鎌倉公方の補佐役である関東管領山内上杉氏の被官となっていました。発給者「兵部少輔元□」なる人物は、山内上杉氏の家臣の一人で、鎌倉にいた奉行人と思われます。発給された時期ですが、「十一月十三日」の日付のみで、年次が分かりません。しかし文書の内容から推定ができます。それは傍線部の③に「しやうくん様御定之事ニありけ二候、何様目出度存候」とある点からです。兵部少輔元□は「しやうくん」（将軍）の決定を鳥名木国義に伝え、目出度いことと述べています。

室町将軍で１１月１３日直前にその位に就いた人物としては、７代将軍の足利義勝がいます。嘉吉２年（1442）１１月７日のことです（『康富記』など）。京都から鎌倉への情報が数日かかったとすれば、１３日の日付は最も適当です。前年の嘉吉元年６月、６代将軍義教が嘉吉の乱で横死したため、幕府は混乱し、将軍位も空位のままでした。それゆえに目出度いことと述べているのでしょう。ここから本文書は嘉吉２年のものと判明します。

つぎに、東国政治史の新知見となる点を述べましょう。永享の乱（1438～39）・結城合戦（1440～41）後の、鎌倉府（鎌倉公方―関東管領）の政治動向です。鎌倉府は永享の乱以前から鎌倉公方と関東管領の対立があり、結果、公方足利持氏は永享の乱で自殺し、その子春王丸・安王丸は結城合戦後処刑され、子の一人万寿王丸は信濃佐久の大井持光のもとに匿われていました。関東管領上杉氏が実権を握ったのです。

その政治過程について、傍線部の①と②から新しい事実がわかります。

まず①ですが、ここで兵部少輔元□は、本文書を出した二、三日後に、誰かが「自白井御帰陣候」すると、鳥名木国義に伝えています。「帰陣」、つまり合戦の陣所である「白井」を引き払って帰ってくるということです。主体は誰でしょうか。「御」と敬称が付けられており、また兵部少輔元□の居る鎌倉へ帰ってくるという意味ととれますので、当時の山内上杉氏の当主と考えるのが適当です。関東管領山内上杉氏の当主は、有名な上杉憲実の弟上杉清方でした。では陣所を敷いた「白井」は何処でしょうか。山内上杉氏関係で「白井」といえば、上野白井（群馬県子持村白井）が思い浮かびます。上杉氏家臣の白井長尾氏の居城のあった地です。つまりこの部分からは、嘉吉２年１１月中旬まで、何らかの合戦、もしくは軍事的緊張があって、山内上杉氏は軍勢を率いて上野白井城に在陣しており、おそらくその問題が解決したため鎌倉へ帰陣する事態になったと考えられます。この点が従来知られていなかった新事実です。この軍事的問題の存在とその解決という推測は、つぎの下線部②の理解に関わってきますので、②を見ていきましょう。

②では、この時期に「白心様」なる人物が、右の白井に到着した、そして「此方」（鎌倉）にも「御越」（やってくる）するという「雑説」（噂）があるということを、鳥名木国義に伝えています。「白心様」の白井到着と、山内上杉氏の白井から鎌倉への帰陣は密接な関係があると思われます。この点で、「白心様」なる人物は誰か、白井へやってきた理由は何かという点の理解が重要です。

「白心様」とは、この時期に同音で「柏心周操」なる禅僧がいます。臨済宗夢窓派の五山僧で、永享９年（1437）京都相国寺の第４９世に就き、同１１年、室町幕府と東国鎌倉府の外交交渉役である関東使節に任命された人物です。永享の乱（1438～39）では、鎌倉公方足利持氏の処分問題で、将軍義教の意を当時の関東管領上杉憲実に伝える役割を担っています。上杉氏の陣所の上野白井へ来て、さらに鎌倉まで来ると噂されている点、さらに「様」付けされ「御越」と敬称が付けられて点から見ても、この人物に間違いありません。

では白井へやって来た理由は何でしょうか。これは白井への到着と同時に上杉方軍勢の帰陣となった理由とおそらく密接に関わる問題と思います。ここで問題となるのは、関東管領山内上杉氏が上野白井へ在陣した理由です。考えるヒントは、永享の乱・結城合戦直後の関東の政治状況にあります。

鎌倉公方持氏やその二人の遺児の死後、鎌倉府の実権は、京都の幕府をバックとする関東管領山内上杉氏に握られていました。しかし信濃佐久に匿われていた遺児の一人万寿王丸（のちの足利成氏）は、結城合戦（1440～41）直後の嘉吉元年（1441）７月に、早くも反上杉氏の軍事行動を開始しようとしていたのです。このときの軍勢催促状が『角田石川文書』の中に残されています。しかし従来は、この決起が実際に行われたものかは不明であり、掛け声のみであったのではないかと、否定的に見られてきました（百瀬今朝雄「足利成氏の幼名」『日本歴史』４１４号）。

しかし本文書からうかがえる新事実の一つ、嘉吉２年１１月前の、山内上杉氏の上野白井在城の事実は、そのような従来の見方を見直させるものです。万寿王丸の潜んでいた信濃佐久とこの上野白井は比較的近接する場になります。ここから、万寿王丸の反上杉氏軍事行動は実際に行われたものであり、翌年のこの時期まで継続していたのではないか、と推測することが可能となります。

この見方を補強するのが、本文書から分かる新事実のもう一つ、関東使節柏心周操の動向です。柏心周操は京都から上野白井へ向かうとき、どのルートをとったのでしょうか。兵部少輔元□は、柏心周操が上野白井からさらに鎌倉へ向かうとの噂があると述べていますが、これは、鎌倉のある東海道ルートではなく、東山道ルートをとったことを暗示します。その点で何よりも注目されることは、万寿王丸が潜んでいた信濃佐久がこのルート上に位置することです。当時の政治状況からすれば、間違いなく佐久の万寿王丸の元に柏心は立ち寄ったのではないでしょうか。それも、様子伺いなどという程度ではなく、立ち寄って何らかの幕命を伝えること、それこそが本来の使命であったのではないか、その結果を得て上野白井への到着があり、上杉方軍勢の帰陣する事態になったのではないか、ということです。

この時期の室町幕府は、嘉吉の乱の混乱を乗り越え、７代将軍義勝を擁立する直前で、東国の政治的混乱にも介在する余地が生まれていました。この時幕府の中枢を担っていた管領の畠山持国は、のちに成氏（万寿王丸）が鎌倉公方に復権したとき、親派として行動

した人物でもあります。幕府がそれまでの反万寿王丸の姿勢を改めたという可能性があるのです。つまり関東管領山内氏に反旗を翻す万寿王丸に、幕府が宥免を与え、関東管領上杉氏との融和、ひいてはその背後にある幕府との融和を図った、その使命を関東使節の柏心周操が担った、それゆえに柏心は上杉方の陣所白井へ行く必要もあり、上杉氏軍勢の帰陣という事態にもなった、という想定です。万寿王丸が鎌倉公方として復権してくる（「御代始」）のはそれから間もなくのことで、この想定を補強します。

中世文書、とくに東国の文書はその残存が僅少で、このように新たな文書が見出された場合、そこより知られる情報はきわめて貴重です。とくに鳥名木文書中の山内上杉氏家臣からの書状は、中世東国政治史に貴重な情報を数多く持っています。『茨城県史料』には未採録であった鳥名木文書のこの１点からは、中世東国政治史、とくに嘉吉２年段階の、幕府―鎌倉公方―関東管領三者をめぐって展開したこのような政治史の新事実が分かるのです。

歴史館史料部では、このような貴重な史料を含め約１７万点の歴史資料を公開しています。多くの方に活用されることを願っています。

（本文の詳細は内山俊身「鳥名木文書に見る室町期東国の政治状況」『茨城県立歴史館報』３１号に述べられています。あわせてご参照ください）

（首席研究員　内山俊身）